HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	農民経営の展開過程と農民の学習
Author(s)	柳田, 泰典
Citation	北海道大學教育學部紀要, 38, 205-218
Issue Date	1981-03
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/29241
Type	departmental bulletin paper
File Information	38_P205-218.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

農民経営の展開過程と農民の学習

柳田泰典

A Study on the Development of the Peasant Farming at the Present Stage and the Farmer's Learning

Yasunori Yanagida

はじめに

北海道農業は1960年代にトラクター機械が導入され，1970年代後半には大型トラクター機械化「一貫」体系段階へ急速に移行しつつある。これは，日本農業が「道具＋裸手」労働，畜力道具，畜力機械の段階から機械体系段階への移行過程に入ったことを意味し，日本農業における歴史的画期を形成している。

このような日本農業における大型トラクター機械化「一貫」体系への移行は，農民経営の機械化による資本主義的大農業への発展としてではなく，農民経営における機械化，共同利用組合における機械化，地域的（主として農協）な機械化，すなわち機械化の三層構造をとりながら農民経営を中心とした集団的，地域的な生産力形成として発展する。このような機械化の発展は同時に農業の専門化，共同利用組合の発展と定着，農民層分解の激化の過程である。農業の専門化は，地域的な専門化（主産地形成），農民経営における専門化として進展する。共同利用組合の発展と定着は，共同利用組合がトラクター機械の共同導入（共同所有・個別利用）という役割から，大型機械・施設の導入さらに農民経営間の機械にもとづく共同労働を発展させる。農民層分解は生産規模の拡大，階層間格差の拡大，多数の離農農家の激発である。

このような過程を農民経営にそくしてみれば，資本主義下の農民的農業における農業生産力の発展とそれを基礎とする労働の社会化の萌芽的展開過程と貧困化の進展と特徴づけることができる。これは第１に，農民経営と地域農業はますます強く社会的分業の一環にくみこまれるとともに，他方では資本主義的市場変動との矛盾をますます激しくしていく。第２に，農業労働は機械労働を中心とするようになり家族協業の性格を変化させるとともに，地域内分業，農民経営間の機械にもとづく共同労働を進展させる。第３に，農民経営の展開過程は新たな性格をうけとる。これは，階層間格差の拡大，経営形態の変化・発展，家族労働力再生産が農民経営の展開過程におよぼす性格の変化，農家経済の性格変化である。

本論は，大型トラクター機械化「一貫」体系によって新たな段階を迎えている北海道農業，地域農業，農民経営の性格を明らかにするため，第１に，大型トラクター機械化「一貫」体系段階における地域農業の特徴について明らかにする。第２に，大型トラクター機械化「一貫」体系と労働過程の性格について明らかにする。第３に，大型トラクター機械化「一貫」体系段階における農民経営の展開過程について明らかにする。第４に，農民の労働（経営も含めて）と学習，教育の特徴を明らかにする。（尚，分析対象は北海道畑作地域[1)]の実証研究による）

注

1）調査対象地域は，オホーツク海に面した寒冷地帯北海道網走支庁の斜里町と常呂町である。斜里町は原料農産物（澱粉原料用馬鈴薯，製糖用てんさい，小麦）地域で調査農家は畑作専業農家29戸で，調査年は1978年，1979年である。常呂町は畑作を中心に酪農，養豚も行なわれている地域である。畑作は澱粉原料用馬鈴薯，食用・加工用馬鈴薯，製糖用てんさい，豆類，小麦さらに玉ネギ，ワサビ，ニンニク等作付構成の多様性を特徴とする。調査農家は47戸，調査年は1980年である。

2）労働の社会化と貧困化については，山田定市『地域農業と農民教育』，日本経済評論社，1980年を参照。

第1章 地域農業の展開過程

地域農業の展開過程は農民経営，地域農業が農業の機械化，農業の専門化を基礎に商業的農業として発展する過程であり，同時に，共同利用組合の進展，地域的生産力の形成，農民層分解の激化の過程である。

1．農業の機械化

農業の機械化は，機械それ自体の発展とともに，個別農民経営における機械化，共同利用組合における機械化，地域（農協）における機械化の三層構造をもって展開する。

これらをトラクターの所有の動態でみると，トラクターの導入は1960年以降わずか20年間に急速にすすみ，とりわけ70年代に入いり加速的に進展する。そして，トラクターの所有形態は個人所有と共同所有（利用組合有を含む）の並存，さらに，馬力規模の異なるトラクターの複数所有へと進展している。これをトラクターだけでなく作業機（ハーベスター等）の共同を含めると，共同所有農家の比率はさらに増加し50～60%の農家はなんらかの形で共同所有をしている。また，共同所有農家は階層的なかたよりが少なく，全階層的な参加を特徴としている。

地域的な機械化・施設化は流通過程（流通過程に延長された生産過程）を中心に展開する。これは，澱粉加工工場，てんさい製糖工場，馬鈴薯貯蔵施設，小麦の乾燥・貯蔵施設，ハッカ蒸溜工場，ワサビ乾燥・加工工場，玉ネギ貯蔵庫，農協牧場等である。これらの地域的な機械化・施設化は農業生産の発展条件となるとともに，作付構成変動の中で廃止，操業短縮，さらには急速な機械・施設の拡大をともないながら進展してきた。

2．農業の専門化

農業の専門化は，機械化を基礎とする生産手段の発展，労働生産性の飛躍的発展と農産物市場との関わりで展開する経営形態の質的発展，生産規模の拡大，作付作物の単純化を特徴としている。これは，耕馬とその作業機，道具を主要な労働手段とする段階の農民経営が小経営面積，労働競合をふせぐための多作物作付，数羽頭の家畜飼養（乳牛，豚，ニワトリ等），さらに経営内における自給用種子生産，耕馬用えん麦の作付等を特徴としているのに比べ質的な発展を意味している。経営形態は畑作専業経営，酪農専業経営，混同経営へとそれぞれ質的な発展をする。これらを家畜飼養の推移でみると飼養農家数の激減，1戸当り飼養頭羽数の急増としてあらわれている。また，生産規模の拡大は1戸当り経営総耕地面積の急増としてあらわれる。作付作物の単純化は，作付作物数の減少と中心作物の形成，さらに，作付構成の急速な傾向的変動（生産力発展と市場変動の中で一定の方向性をもって急速に変化する）を特徴としている。

3．農民層分解

農業の機械化，農業の専門化の過程は，農民層分解の激化の過程でもある。これを経営耕

地規模別農家数でみると，農家数は20年間（1960年から1979年）に離農によって半減している。農民層分解における分解基軸は，ほぼ5年ごとに5.0haずつ上昇し，1979年には20.0ha[1]にいたっている。こうして農民層分解は，中規模以下層の農民経営を没落の危機にさらしながら，分解基軸のたえざる上昇によって上層農家の経営をもますます不安定なものにしている。

4．地域農業の展開過程

地域農業の展開過程は第1に，地域的生産力の形成である。これは地域内分業の進展と地域的な機械化・施設化を基礎としている。地域内分業は，農民経営内で行なわれていた労働過程の地域的な分化，発展としてあらわれる。地域的な機械化・施設化は，直接的生産過程の機械化に先行し，流通過程を中心に進展する。またこれは，地域内分業の物質的基礎として地域内分業をおしすすめていく。第2に，主産地の形成である。これは，農業の専門化（経営形態の質的発展，作付作物の単純化，中心作物の形成，作付構成の傾向的変動）の地域的展開過程である。第3に，地域的矛盾の進展である。地域的生産力の形成と主産地形成は，農産物市場の変動（市場の無政府状態）との矛盾や農業生産力発展の矛盾（地力低下等）をはじめとする農業諸問題を，地域農業の発展における矛盾とするようになり，その解決も地域的な性格を進展させる。

こうして地域農業の現段階的特徴，すなわち，大型トラクター機械化「一貫」体系段階における地域農業は，機械化の三層構造，農業の専門化（個別経営，地域）を基礎に商業的農業として発展し，社会的分業の一環に強く組み込まれていくとともに資本主義的市場変動の無政府状態との矛盾を激化させていく。また，農民経営は，農民経営間さらに地域における社会的経済的結合関係を深めるとともに，他方で農民層分解の激化にさらされる。

注

1）分解基軸は，地域，経営形態（稲作，畑作，酪農等）によって異なる。ここに記した20.0haは，斜里町，常呂町におけるものである。

第2章　大型トラクター機械化「一貫」体系と労働過程の性格

農業における機械化は，作物間，個々の労働過程間に不均等に作用し跛行的な展開を示す。また，農業労働の多様性は機械の発展に多様性を与え，農業における機械化は複雑な発展過程となる。これは農業が生物生産であることからうまれ，農業の機械化は工業に対して相対的に遅れることになる。

このような農業の機械化における跛行性と多様性は，作物間，個々の労働過程間に機械化された部分（作物）と「道具＋裸手」労働部分（作物）の並存過程をつくりながら展開する。大型トラクター機械化「一貫」体系は，農業における機械化が跛行的な段階から「一貫」体系[1]へ発展したことを意味する。また，農業労働は機械を基礎に編成されるようになるとともに，農業労働（＝機械労働）は一定の技能[2]さえあれば誰にでもできるものへと発展する。

第1節　農業機械化の動態過程

農業における機械化の動態過程は，農業機械の多様性をもった発展と機械化の段階的発展を特徴としている。

農業機械の多様性は原動力と作業機によって特徴づけることができる。まず，農業機械を原動力によって性格づけると，人力機械，畜力機械，トラクター機械，独立機械[3]となる。作業機によって性格づけると，単一機械，部分機械，結合機械，総合機械となる。このような作業機の性格規定は，農業労働との関わりで行なわれる。次に作業機の性格についてのべる。

〔作業機の性格〕

畑作農業の労働過程は，種子予措，育苗，堆厩肥撒布，耕耘，播種および移植，間引，中耕，除草，培土，防除，追肥，収穫過程に大別することができる。また，これらの労働過程はそれぞれがさらに多くの異種労働から成りたっている（例えば，耕耘；耕起―整地等，播種；畦立て―施肥―播種―覆土―鎮圧等）。このような労働過程の特徴からみると機械は２つの系をもって発展しているということができる。《第１の系》これは，播種，移植，収穫などの機械化で，いくつかの異種労働が連続作業過程として１つの機械となる機械化である。このような機械化は部分機械（異種労働の特定部分の機械：ディガー～収穫過程で掘るだけのもの），結合機械（異種労働の複数部分の機械：ハーベスター～掘る―茎部切断―土落し―積載），総合機械（異種労働の全体的な機械：自走式ハーベスター～掘る―茎部切断―土落し―積載）へと発展する。結合機械と総合機械は補助労働力の性格に大きな違いがある。結合機械は機械の連続作業に組みこまれた補助労働力を必要とするのに対し，総合機械は補助労働力を必要としないか，必要とする場合も機械の監視的な性格となる。《第２の系》これは，部分機械が部分機械として発展していく系である。このような機械は単一機械であり，発展方向は性能，規模の向上と種類の多様化を特徴としている。また，これらの単一機械は補助労働力を必要としない（例えば，プラウ，ハロー，カルチベーター，スプレア，フロントローダー等）。このような機械の性格によって畑作機械を分類すると表１のようになる。

表―１　農　業　機　械

		作業＼機械	畜力機械	トラクター機械				
作物共通	単一機械	耕転	プラウ，ハロー	プラウ，ハロー				
		中耕	カルチベーター	カルチベーター				
		防除		スプレアー				
		運搬	保導車，馬車，馬ソリ	トレーラー，フロントローダー				
作物別差異	部分・結合・総合機械	作業＼部分，結合 汎or専	部分機械	部分機械		結合機械		総合機械
			汎用	専用	汎用	専用	汎用	専用	専用
		施肥播種	施肥機 人力播種機 (てんさい，小麦)				総合施肥播種機（馬鈴薯，てんさい，小麦）	ポテトプランター	全自動ポテトプランター スタンヘイ（てんさい） グレンドリル(小麦)
		移植						ビート移植機	
		収穫		イモ掘機 ビートリフター	兼用ディガー（馬鈴薯，てんさい）	ポテトディガー ビートリフター ビートタッパー	兼用ハーベスター（馬鈴薯，てんさい）	ポテトハーベスター ビートハーベスター	自走式ビートハーベスター
独立機械			動力噴霧機		トラック	バインダー(小麦収穫)	ダンプトラック	自脱型コンバイン（小麦収穫）	普通型コンバイン(小麦収穫)

注１．1960年から1978年までの畑作農業機械である。

２．玉ネギプランター；結合機械

このような機械化の多様性とともに，農業における機械化は作物間，個々の労働過程間に不均等に作用し，多様性と跛行性をもちながら段階的に発展する。これは，第Ⅰ段階　畜力機械化段階，第Ⅱ段階　跛行的トラクター機械化段階，第Ⅲ段階　大型トラクター機械化「一貫」体系段階である[4]。大型トラクター機械化「一貫」体系は，トラクター（原動機）の大型化，馬力規模の多種類化，単一機械の性能，規模の向上，種類の多様化，結合機械，総合機械および独立機械（これ自体も総合機械化する）の発展を特徴とする。これを主要労働過程（耕耘＝播種又は移植＝収穫）のもっともすすんだ機械でのべよう。澱粉原料用馬鈴薯；プラウ，ハロー(単一機械)＝ポテトプランター(結合機械)＝ポテトハーベスター(結合機械)とダンプトラック(独立機械・総合機械)，製糖用てんさい；プラウ，ハロー(単一機械)＝スタンヘイ（総合機械～直播）およびビート移植機（結合機械～移植)＝自走式ビートハーベスター(総合機械)とダンプトラック(独立機械・総合機械)，小麦；プラウ，ハロー(単一機械)＝グレンドリル(総合機械)＝普通型コンバイン（独立機械・総合機械）とダンプトラック（独立機械・総合機械）となる。

第2節　労働過程の性格変化

大型トラクター機械化「一貫」体系段階における労働過程の性格変化は次の諸過程のなかにあらわれる。第1に，地域内分業の発展である。これは地域的な機械化・施設化を物質的基礎とし，これまで農民経営内で行なわれていた労働過程の地域的な分化，発展である。第2に，農民経営における労働過程の性格変化である。これは機械化を基礎とする家族協業の性格変化と農民経営間の機械にもとづく共同労働の進展である。(以下では家族協業と共同労働についてのべる)

1．家族協業の性格変化

大型トラクター機械化「一貫」体系段階における農民経営の労働過程は，次のような特徴をもつ。第1に，大部分の作業はトラクター機械，すなわち機械労働によって行なわれるようになる。第2に，労働内容は単一機械労働（プラウ，スプレア等），結合機械労働（ポテトプランター，ビート移植機，ハーベスター等），総合機械労働（グレンドリル，自走式ハーベスター，ダンプトラック等）を中心とするようになる。第3に，単一機械の多様化，結合機械，総合機械の発展は，機械にもとづく分業・協業，機械と機械の同時・連続稼動を発展させる。これは機械化の発展が，機械作業の必要とする労働力数を一方では増加させながら，他方では減少させることを基礎としている。必要労働力数の増加は，てんさい移植（移植機)，てんさいの育苗播種(育苗播種機)，馬鈴薯播種(ポテトプランター)，収穫(ハーベスター)等で必要労働力数は2～6人へ増加する。これらは結合機械で機械にもとづく分業・協業を発展させる。必要労働力数の減少は，小麦の播種（グレンドリル)，てんさい直播（スタンヘイ)，てんさい収穫（自走式ハーベスター)，小麦収穫（普通型コンバイン)，運搬（ダンプトラック）等で必要労働力数は1人まで減少する。これらは総合機械で機械と機械の同時・連続稼動を発展させる。第4に，このような機械化の発展の中で，「道具＋裸手」労働は部分的であるが依然として残存している。(種イモ切り，除草，間引等）第5に，機械化の発展は，大部分の作業を経験，熟練，生理的制約をもつ労働から，一定の技能さえあれば誰にでもできるものに変えた。しかし，第6に，男女の作業分担は男子がトラクター機械操作労働，トラック運転を行い，女子が機械

補助労働,「道具＋裸手」労働を行うという性別分担として展開している。

このような大型トラクター機械化「一貫」体系段階の労働過程は，家族協業の性格を変化させるとともに，家族協業の枠をこえた農民経営間の共同労働を進展させる。

家族協業においては，第１に，男子基幹労働力１人の農家では女子によるトラクター機械操作労働，トラック運転の必要がまし，女子による機械労働がすすむ。これは,「忙しい時に」「移動の時だけ」部分的に行うというものと，総合機械の発展，たとえば自走式ハーベスター（男子）とダンプトラック（女子）の同時・連続作業の中で進展する。そしてこれは，農民経営が家族基幹労働力２人（経営主と妻）の時期（少なくとも10数年間）を経過せざるをえないことからみて，全ての農民経営に共通する特徴となる。第２に，結合機械，総合機械にもとづく分業・協業は作業の安全上，女子のトラクター機械操作技能の修得を必要とするようになる。

こうして大型トラクター機械化「一貫」体系は，家族協業を機械にもとづく分業・協業という段階に進展させるとともに，機械化の跛行性を基礎としていた性別による労働分担を部分的にうちやぶりつつある。

２．共同労働の進展

家族協業の枠をこえた農民経営間の機械にもとづく分業・協業は，大型トラクター機械化「一貫」体系段階の重要な特徴の１つである。これは，機械化による必要労働力数の増加，機械と機械の同時・連続作業の進展，大型機械・施設の共同導入等を基礎に進展する。この共同労働は機械に対応した一定の技能を必要とする。

機械化による必要労働力数の増加は，雇用労働力の導入または共同労働としてあらわれる。共同労働は雇用労働力導入上の問題（確保の困難性，労賃の上昇等）とともに，作業内容が機械に対応した一定の技能を必要とすることによって行なわれる。たとえば，てんさいの移植作業は雇用労働力の導入または共同労働の２形態をとるが，機械に対応した一定の技能を必要とするてんさいの育苗播種は農家間の共同労働が中心となる。

機械と機械の同時・連続稼動による共同労働は，個別農家における継起的作業が集中・連続作業として行なわれる。これらはとくに収穫の適期作業を確保するために行なわれる場合が多い。そして最近では，春作業（耕起一整地一施肥・播種の集中・連続作業）においてもみられる。この同時・連続稼動で使用される機械台数は作業内容と参加農家数によって変化する。（調査で最も多かったものは，５戸の共同労働で機械５台の同時・連続稼動であった）

大型機械・施設の導入による共同労働は，同時に共同労働を前提とした機械・施設の導入という性格をもち，共同利用組合として進展する。これは作業規模，作業内容において農業労働に新しい質的発展をもたらす。この共同労働は参加農家数の多さを１つの特徴とし，労働過程は作業人数の多い分業・協業となるとともに，計画，準備，作業管理等の指揮監督労働を必要とするようになる。具体的な例をあげると，てんさいの共同育苗施設がある。この共同労働は14名ぐらい（１戸２名出役）で行なわれ，指揮監督労働は生産，作業計画，施肥設計，肥料混合，機械調整，播種作業管理，全体作業管理等で３～４名（男子）の担当者によって行なわれる。この担当者は利用組合の役員（組合長，会計，機械係等）と技能水準の高い人が行い，上層農家にかたより，一度決まると固定化される傾向がある。

このようにして，大型トラクター機械化「一貫」体系は，機械の性格を基礎に共同労働の必要性と可能性を拡大し，家族協業の枠をこえた機械にもとづく分業・協業を進展させる。こ

の機械にもとづく共同労働は，農民経営間の社会的経済的結合関係を深めるとともに，農業生産を質的に発展させる。これは第１に，個別経験的な農業労働から集団的科学的な農業労働への発展である。とくにこれは大型機械・施設における共同労働で進展する。その内容は，労働分割と専門担当者の形成，技能の高位・平準化（技能の相互浸透，集団的・科学的修得[5]），さらに性別による作業分担の後退である。第２に，農業生産力の発展と平準化である。これは，集中作業による労働生産性の向上，適期作業の集団的確保によって進展する。しかし，共同労働はこのような前進面とともに，第３には，階層間の矛盾，男女の性別による労働分担，専門担当者の固定化という問題をもっているのである。

こうして大型トラクター機械化「一貫」体系は，農業における機械化を新らたな段階に発展させるとともに，農業労働の質的発展さらに農民経営間の機械にもとづく共同労働を発展させる。

注

1）「一貫」体系における「一貫」は２つの意味をもっている。第１に，機械化を主要労働過程（耕耘過程，播種過程，収穫過程）でみると，ほぼ一貫体系化する。しかし，労働過程全体をみると「道具＋裸手」労働は依然として残存している。また，農業における重要な労働手段である土地改良は充分すすんでいないということ。第２に，生産手段としてみると，種子品種等は機械化に対応したものへの改良が遅れていることを意味している。

2）一定の技能とは，機械に対応する基礎知識と基礎訓練にもとづいた技能をさしている。

3）人力機械，畜力機械，トラクター機械，独立機械の規定について。機械の発展過程は道具から機械への発展過程と，機械それ自体が原動力―伝動機構―作業機の相互関係として発展する。後者の相互関係によって規定するとこのようになる。尚，独立機械とはそれ自体の中に原動機を内蔵しているものをさす。

4）機械化の段階規定について。機械化の段階規定は，農業生産の主要労働過程（耕耘，播種，収穫）における機械化の水準によって行った。これによれば1960年から1978年までの機械化は３段階，20類型に性格づけることができる。詳しくは，拙稿「畑作農業の機械化と農民教育」，美土路達雄編著『現代農民教育の基礎構造』，北大図書刊行会，1981年を参照。

5）集団的・科学的修得とは，共同労働に参加する全ての農民（男女とも）が研修センター（北海道立美幌農業機械化研修センター）で技能修得をしたことをさす。

6）婦人の機械使用の実態と性格については同紀要（第38号，1981），美土路，千葉，古村論文を参照。

第３章　農民経営の展開過程

農民経営の展開過程を第１に，大型トラクター機械化「一貫」体系段階における農民経営の性格として，第２に，農民がどのような判断をもって営農を展開してきたのか(農民経営史)，この２側面から分析しよう。

第１節　大型トラクター機械化「一貫」体系段階における農民経営の展開過程

大型トラクター機械化「一貫」体系段階における農民経営の展開過程は第１に，階層間格差の急速な拡大，第２に，経営形態の変化，発展，第３に，家族労働力再生産が農民経営の展開過程におよぼす性格の変化，第４に，農家経済の性格変化を特徴としている。

１．階層間格差の拡大

農民経営の展開過程は，経営総耕地面積で基礎づけると発展過程，階層性において類型的[1]な展開をたどる。そしてこれら類型の格差は，大型トラクター機械化「一貫」体系段階において急速に拡大する。これを斜里町の調査でみると次のようになる。

畜力機械化段階（1963年） この段階の階層間格差は小さく，5ha～9haの農家が8割を占め，10ha～12haの農家が2割である。跛行的トラクター機械化段階（1964年～1970年） この段階の経営総耕地面積の拡大は漸増を特徴とする。大型トラクター機械化「一貫」体系段階（1971年～1978年）この段階の規模拡大はほとんどの類型ですすみ，同時に類型間格差（階層間格差）を急速に拡大する。これは，機械化による労働生産性の飛躍的発展（規模拡大の可能性の飛躍的拡大）が，それぞれの農民経営に異なった作用となることによる。

2．経営形態の変化・発展[2]

機械化を基礎とする生産手段の発展は，経営形態，作付面積，作付構成の自由度（多面的発展の可能性）を拡大する。これは農業生産力の発展という積極面をもつとともに，他方農産物市場の無政府状態の中では，特定作物への作付集中と連作，作付構成の急速な変動等農業生産の不安定性を激化させる。これらを機械化段階と階層性において特徴づけよう。

畜力機械化段階は経営総耕地面積の狭少さと多作物作付を特徴とする。これは機械化の水準の低さに規定された畜力機械化段階の輪作であり，階層的な差は小さい。跛行的トラクター機械化段階は経営総耕地面積の漸増，特定作物への作付集中の進展，畜力機械化段階に行なわれていた輪作の後退を特徴とする。大型トラクター機械化「一貫」体系段階は，経営総耕地面積の急速な拡大と階層間格差の拡大，特定作物への急速な作付集中と連作（略奪農業）の進展，そして他方では連作障害（地力低下，病虫害の発生等）の激化を特徴とする。また，作付構成の急激な変動はこの段階の特徴である。

大型トラクター機械化「一貫」体系段階の特徴を斜里町の調査でみよう。ここでのこの段階は1971年から1974年，1975年から1978年の2つの時期に区分できる。1971年から1974年は，経営総耕地面積の急速な拡大と馬鈴薯作付比率の急上昇（馬鈴薯単作農家さえ出る）を特徴とする。階層的にみれば，経営総耕地面積の急速に拡大する上層農家ほど馬鈴薯作付比率を上昇させ，経営総耕地面積をそれほど拡大しない農家は，馬鈴薯作付比率を作付構成の内部移動で行いその増加率は小さい。1975年から1978年は，馬鈴薯作付集中による連作障害（地力低下，病虫害―シストセン虫[3]の発生等），馬鈴薯価格の停滞，てんさい，小麦価格の上昇の中で作付構成は急速に変動する。この作付構成変動は，馬鈴薯の急速な後退，てんさい，小麦の急上昇とによって，馬鈴薯の作付集中―連作から馬鈴薯，てんさい，小麦の3作物による輪作体系[4]への接近である。これを階層的にみると，規模の大きい農家ほど臨時応変（「有利」）に対応しており，規模の小さい農家は生産力上の矛盾，市場変動に十分対応しきれていない。

3．家族労働力の再生産

農民経営における労働力は家族労働力に基礎づけられている。また，家族労働力の再生産過程は農民経営の展開過程に重大な影響を及ぼす。大型トラクター機械化「一貫」体系段階における家族労働力の再生産過程は，階層間格差の急速な拡大の主要因となる。

農民経営における標準的な家族労働力の再生産過程[5]は3期にわけることができる。第1期は労働力停滞期であり，これは13年ぐらいつづく基幹労働力2人（経営主と妻）の時期である。経営主の年令でいえば35才から47才ぐらいまでである。第2期は労働力増加，世代交替期

であり，これも13年ぐらいつづく。これは後継者の就農，結婚，後継者の母親は子守りのために補助労働力となる。すなわち労働力は3人→4人→3.5人となる時期である。経営主の年令は48才から60才，後継者の年令は18才から30才ぐらいまでである。第3期は労働力の減少期であり，父母が補助労働力から引退へとすすむ時期でほぼ5年間ぐらいである。

農民経営間の階層間格差は次のような特徴がある。第1に，家族労働力の再生産を確保している農家と確保できなかった農家との格差。この確保できなかった農家の要因は，経営主のケガ，父親の早い他界，後継者の未婚(嫁不足等),後継者の他出，男児の出産がなかった等である。第2に，家族労働力の再生産を確保している農家間での格差。これは機械化の過程が家族労働力再生産のどの時期でむかえているか，すなわち，労働力停滞期か，労働力増加・世代交替期か，労働力減少期かによってひきおこされる。第3に，労働力増加・世代交替期と機械化の過程が対応した農家間の格差。これは労働力増加・世代交替期が文字どおり両方が行なわれる農家と世代交替だけで労働力が増加しない農家（父母が直ちに引退）の格差である。

大型トラクター機械化「一貫」体系段階における階層間格差は，家族労働力再生産の労働力増加・世代交替期をむかえた農家の急速な規模拡大によって進展する。これは，大型トラクター機械化「一貫」体系が労働生産性の飛躍的発展によって急速な規模拡大を可能にするとともに，農民経営の規模拡大が多額の借入金導入をともなわざるをえないことによる。こうして大型トラクター機械化「一貫」体系段階は，労働力増加・世代交替期をむかえた農家に急速な規模拡大条件を与え，階層間格差は急速に拡大していくのである。

4．農家経済

大型トラクター機械化「一貫」体系段階における農家経済の特徴は第1に，農業所得率の傾向的低下，第2に，農家経済の悪化である。

農業所得率の傾向的低下は，農業粗収入の停滞，不安定化，農業経営費の上昇によって進展している。これを斜里全町でみると，農業所得率は43.2%（1973年）から37.8%（1978年）へと傾向的に低下する。農家経済の悪化は，農業経営費の上昇（生産資材費，賃料料金，減価償却費等），借入金と返済金の増加，租税公課の増加等によって進展している。農業経営費の上昇は，購入諸資材費（生産資材費，燃料，化学肥料，種子等）の高騰，賃料料金（共同利用，地域的な機械・施設の利用料）の増加である。減価償却費の増加は機械化の進展とともにすすみ，調査農家（斜里）の1戸当り償却費は年140万円となっている。借入金は，大型トラクター機械化「一貫」体系の導入，経営総耕地面積の拡大によって急速に増加してきた。これを借入金総額でみると，1970年は全体として100万円～200万円ぐらいで階層間格差は少ない。これに対して，機械導入，規模拡大のすすんだ1978年では数百万円から2000万円に増加し，階層間格差を拡大する。

このような特徴を農家経済にそくしてみよう。(斜里町農家，1978年)　この特徴は第1に，農家経済における階層間格差の拡大である。これは農業粗収入，農業経営費，農業所得における階層差である。第2に，農業所得から家計費をひき「利潤」を出すと，この「利潤」においても階層差は大きい。しかし，第3に，この「利潤」から税金，支払い利息，資金返済等が行なわれる過程で,「利潤」は全階層的に消滅してしまうのである。

こうして大型トラクター機械化「一貫」体系段階の農家経済は，農産物価格の停滞，不安定，変動性と農業経営費の上昇の中で農業所得率を傾向的に低下させていく。そして，機械化，

共同利用，地域的利用の進展は，減価償却費と賃料々金をますます増加させ，規模拡大は借入金の膨張，支払利息，資金返済金を増加させていく。まさしく農民経営は，農業収入の不安定化と支出の確実な膨張の中で農業再生産を行っているのであり，これらに対する経済的，生産力的な判断と対応をますます必要としているのであり，それなしに農業再生産を行うことはますます困難になっていくのである。

第2節 農民経営史

農民経営の展開過程は，経営の不安定期と発展期をもっている。この2つの局面で農民はどのような問題を抱え，解決して来たのか，また，どのような意識と判断をもってきたのだろうか。(常呂町調査，1980年)

農民経営の不安定期の問題状況は，冷害等による不作，家族労働力の不足，農家経済の悪化を中心にしている。この原因は，冷害，湿害等の自然災害，家族の結婚による他出，分家，子どもが小さい，規模，土地面積が小さい。農業経営費の上昇，農産物価格の低迷等である。これらの問題状況と原因は，①自然災害，②家族労働力不足（夫婦2人），③生産規模の狭少，④生産資材費の上昇，農産物価格の低迷等社会的な問題の4つに整理することができる。このような問題をかかえた不安定期の農民経営は2つの性格をもって展開する。第1は，問題を積極的に改善していく農民経営である。この農民経営の不安定期は，冷害等の自然災害によるもので短期的な性格をもつ。これらの農民経営は，資金導入，暗渠排水の埋設等によって積極的な改善をすすめる。第2は，不安定期を個別的・勤労主義的な展開を行う農民経営である。これらの農民経営の問題は家族労働力不足，生産規模の狭少を中心としており，「とにかく働いた」「どうしようもなく，苦労してきた」「価格上昇，豊作をまつ」「後継者の就農をまつ」という展開過程である。そして，この不安定期は短期的なものではなく継続的な性格をもつ。このような不安定期に対して発展期は，①土地規模の拡大（生産規模の拡大），②機械の導入，③後継者の就農を主な要因としている。そしてこれら3要因はバラバラなものとしてではなく，3要因が1つのものとして発展期をつくりだしている。ななわち，不安定期から安定期への転換は，家族労働力の再生産過程における後継者の就農を条件としているといえよう。

農民経営史（不安定期，発展期）は階層的な展開過程を示している。現在上層を形成している農民経営は，1960年代までが不安定期で1970年代に入いり発展期を迎えている。中層の農民経営は，1970年代前半まで不安定期がつづき後半に入いり発展期を迎える。これにたいし下層の農民経営は，現在も依然として不安定期がつづいている。

こうして農民経営史の特徴は第1に，農民経営の展開過程は，不安定期と発展期をもっている。そしてこの時期によって農民経営の階層性がつくり出されている。第2に，不安定期と発展期は短期的なものではなく継続的な性格をもっている。第3に，不安定期の問題と原因は，①自然災害，②家族労働力不足，③生産規模の狭少，④生産資材費の上昇，農産物価格の低迷（②，③，④が基礎となる）等であり，この時期農民経営は個別的・勤労主義的経営を継続する。これに対し発展期は，後継者の就農を条件とした土地規模の拡大（生産規模の拡大），機械の導入によって進展する。第4に，農民経営の不安定期と発展期は，家族労働力の再生産過程を基礎に個別的性格を強くもっている。このような農民経営史の個別的性格は，不安定期と発展期にあるそれぞれの農民経営の階層性，経営展開の質的な違いとしてあらわれるが，同時

に，発展期にあっても不安定期の問題④生産資材費の上昇，農産物価格の低迷といった社会的問題を依然として抱えていることを意味している。

農民経営の展開過程は，家族労働力の再生産過程を基礎に不安定期と発展期をもち，それぞれの性格は質的なちがいをもっている。そしてこれは，大型トラクター機械化「一貫」体系の中で，一方における経営発展と他方における個別的，勤労主義的経営の格差を急速に拡大していく。1960年から1980年の機械化の過程の中では，1970年代前半に「労働力の増加と世代交替」を行った層が経営を急速に発展させ，現段階で最も有利な展開をしている。こうして現段階の農民経営は，それ自体のもつ基本的な性格によって階層間格差を急速に拡大させながら，機械化段階の農民経営として展開しているのである。

注

1）農民経営の類型的展開。農民経営の展開過程を経営総耕地面積の推移でみると，急速に拡大してくる経営，ほとんど拡大しない経営等にタイプ別けすることができる。これをさらに階層性によって区分し，類型をつくる。農民経営の展開過程を分析する際この方法は有効である。
2）経営形態。斜里町農家では家畜飼養等は地域的に分化し，畑作専業農家として発展する。
3）シストセン虫は馬鈴薯の病虫で1度発生するとその畑では7年間ぐらい馬鈴薯は作付できなくなる。
4）この輪作は価格変動の中では十分実現の見通しが立たない不安定なものである。
5）これは斜里町調査農家の標準的なものであり，年令も同じである。

第4章　農民の学習と教育

大型トラクター機械化「一貫」体系段階における生産と経営は，それらにたいする農民のかかわり方を変化（農民労働の変化とよぶ）させるとともに，農民の学習と教育を発展させる。

第1節　農民労働の変化

大型トラクター機械化「一貫」体系段階における農民労働の変化は次のような諸過程のなかにあらわれる。第1に，機械化を基礎とする生産手段の発展，第2に，機械による労働過程の性格変化，第3に，農業の専門化，第4に，農家経済の性格変化，第5に，共同利用組合の進展，第6に，地域農業の展開過程である。農民労働における変化の現代的特徴は，科学性，結合性，社会性の進展であり，これらは同時に経験性，個別性との並存過程である。また，農民労働の変化は，階層性，経営形態によるちがい，年令差，男女差をもちながら進展する。

生産手段の発展は，機械化を基礎としながら化学肥料，農薬，除草剤等の多種多様化さらに新品種の開発等によってすすみ，これらは生産手段間の跛行性と不統一性をもちながら，絶えまない変化と発展を特徴としている。また，機械化による労働過程の性格変化は，大部分の作業が機械（機械労働）によって行なわれるようになること，機械にもとづく分業・協業の発展と家族協業の性格変化，さらに家族協業の枠をこえた農民経営間の共同労働の進展によってすすむ。これは，機械に対応した一定の技能さえあれば誰にでもできる作業の増加であり，すべての農民が機械に対応した技能を形成し，それに基づいた労働と労働編成実現の条件を拡大するとともにますます必要とするようになる。農業の専門化は，経営形態の発展，生産規模の拡大，作付作物の単純化と中心作物の形成，作付構成の急速な傾向的変動を特徴としている。これは，農民経営が商業的農業としてますますつよく社会的分業の一環にくみこまれ，農民経

営は不安定さを増大させるとともに，市場対応力の強化をよぎなくされる。この市場対応力は「収益性」「作付面積」「品質の向上」等々であり，農民経営の「営業者」的性格を高めていく。農家経済の性格変化は，農業経営費の上昇（生産資材費，賃料料金，減価償却費等）と農業粗収入の停滞，不安定化による農業所得率の傾向的低下，借入金および返済金，租税公課等の増大によって進展する。農民経営は，これらに対する明確な対応と判断なしに農業生産を発展させていくことがますます困難となっていく。共同利用組合は，共同労働と利用組合の共同業務（組合長，会計，配車係等）を進展させる。共同労働は労働編成の発展による専門担当者つくりだすが，同時に担当者の固定化がすすむ。また，共同労働の出役賃金は労働評価の進展を意味するが，実際には「農家間の和を保つため」という「現実的判断」によって労賃換算＋労働相殺とするものも多い。利用組合における共同業務の進展は，新たな技能形成の条件となる。しかし，担当者が固定化され，全員の技能形成へとは十分進展していない。地域農業の展開過程は，地域的生産力形成（地域的な機械化・施設化，地域的分業），主産地形成，地域的矛盾の進展である。農民経営は地域農業の発展それ自体にますます深くかかわりながら生産を発展していくことが必要となる。このような中で農民労働は，経験性，個別性を基礎にしながら科学性，結合性，社会性をつよめていく。

第2節 農民の学習と教育

大型トラクター機械化「一貫」体系段階における農民の学習と教育は，第1に，その構造は雑誌・新聞，研究会（農家間の経験交流），先進地視察，講習会を基礎に進展している，第2に，トラクター機械操作技能を中心とする各種資格免許の修得の進展，第3に，経営簿記の記帳を中心とした農家経済の分析力能形成の遅れを特徴としている。

雑誌・新聞，研究会，先進地視察，講習会による学習と教育は，現段階の大きな特徴である。雑誌は専門雑誌と農家生活誌の2種類の購読であり，階層的には上中層を中心とし下層の購読は少ない。新聞の購読は全階層的であるが農業専門紙は上層を中心としている。農家間の経験交流は比較的活発に行なわれているが，現段階ではこれを基礎に研究会として進展している。この研究会は農業の専門化とともに進展し，作物別，家畜別に組織されているがとくに活発なものは，玉ネギ振興会，養豚団地協議会等のような市場変動が激しく，品質改良を常に要求されているものである。先進地視察は研究会を中心とした町内，道内の優良農家の視察である。これは生産と経営を総体として実践的に把握するものとして進展している。講習会は全般的な知識（気象情報，価格情報等）の講習，試験研究結果の講習，生産手段等の技能講習という3つの特徴をもって進展している。

トラクター機械操作技能を中心とする各種資格免許の修得についてみる。トラクター機械操作技能は実際の農作業の中で経験的に形成されてきた。これを初めてトラクター操作をしたときの指導方法でみると，経営主は実際に作業し操作方法の指示を受けたもの半数，実演や展示をみながら操作方法を習ったもの，ただ説明のみをうけたもの半数で，大部分は「操作方法」を指導されただけである。トラクター機械操作技能の公的検定として大型特殊免許の取得がすすんでいる。これは社会的な技能の形成過程として前進面をもっているが，道路交通法上の免許（道路を走行するために必要）であり，農作業におけるトラクター機械操作技能としては不十分なものである。こうして，トラクター機械操作技能は経験と経験の継承を中心にしながら，

社会的なトラクター免許取得によって「合理性」が補完されながら進展している。またこれは，男子中心の技能形成から女子を含む技能形成へと進展しつつある。各種資格免許の取得は，生産手段の発展と共同利用組合の進展の中で，ガス溶接資格，危険物取扱資格，劇毒物取扱資格，簿記を中心に進展している。これらの取得を階層的にみると上中層を中心とするが，共同利用組合がそれらを位置づけているところは全体的な取得がすすんでいる。

経営簿記の記帳はもっとも遅れた分野の１つであり，ほとんどの農家でつけられていない。これは，「記帳の仕方がわからない」というものと「２～３年つけていたことがあるが仕事が忙しくなるとついつい記帳しなくなりやめてしまった」「つけてもあまり意味がない」というものがある。そして他方では農協の組合員勘定（農家の経営収支の大半はこれに記載される）が進展し，農家はこれによって経済的判断をするようになっている。

こうして大型トラクター機械化「一貫」体系段階における農民の学習と教育の当面する課題は，第１に，個々の生産手段に対応する技能形成とともに，生産手段の絶えまない変化と発展に対応しえる基礎的科学的な技能修得を系統的にすすめる必要がある。また，これはすべての農民に共通する課題である。そのためには，試験研究機関，社会的技能研修機関，農業改良普及制度，農協の営農指導等の農民的拡充をはかるとともに，農民経営間の経験交流をさらにつよめる必要がある。第２に，農家経済の分析力量の形成である。これは，農家経営簿記の記帳，分析を基礎に農家経済悪化の諸原因の把握と改善方向を明確にする力量である。このことを実現するために当面は，農協組合員勘定を農家経済分析が可能となるように改善するとともに，経済分析の農民経営間交流を活発にする必要がある。第３に，地域的な市場対応力の強化である。これは農民経営の市場対応力を基礎としながら，地域的な市場対応力として発展させていく必要がある。このためには，市場構造分析，農民経営分析，地域農業分析等の客観的データをもとに地域農業とそれぞれの農民経営の発展方向を地域的合意としてつくりだし，実行する力量を形成していく必要がある。

まとめと今後の課題

大型トラクター機械化「一貫」体系は，トラクターの大型高馬力化，馬力規模の多種類化，単一機械の多様化，結合機械，総合機械，独立機械の発展である。これによって機械労働が支配的となり，機械にもとづく分業・協業が進展する。そして，家族協業は性格を変えるとともに農民経営間の機械にもとづく共同労働が進展する。機械化の進展は，共同利用組合に機械の共同導入による経済的負担の軽減と機械にもとづく共同労働組織という性格を与え，共同利用組合は，農民経営の全階層に多様な形態をとりながら進展する。大型トラクター機械化「一貫」体系は，労働生産性の飛躍的発展によって土地規模拡大の条件をひろげるが，土地規模拡大は家族労働力の量と世代交替によって制約づけられ，これによって農民経営間の格差は急速に拡大する。こうして農民経営は，農業生産力の発展の中で，一方では農民経営間の格差を拡しながら，他方で結合関係を深めていくのである。

大型トラクター機械化「一貫」体系を基礎とする生産手段の発展は，経営形態，作付面積，作付構成の自由度（多面的発展の可能性）を拡大する。これは農業生産力の発展という積極面であるが，他方農産物市場変動の無政府状態の中では，特定作物への作付集中（連作）や作付構成の急速な変動等農業生産の不安定性を激化させる。農民経営は農業生産力を発展させると

ともに市場対応力を強化せざる得ない。

大型トラクター機械化「一貫」体系を基礎とする生産手段の発展，農業労働の質的変化，農民経営展開の質的変化，農業生産力の発展と不安定性の増大＝市場対応力の強化等は，農民の学習と教育をますます強く要求するものとなる。

今後の課題として，第1に，生産手段の全面的把握と労働過程分析によって農民労働の現段階的性格をさらに明らかにすること。この場合，機械化の三層構造の諸連関，機械にもとづく分業・協業（家族協業，共同労働），地域内分業の実態を中心に明らかにする。そしてこれらを基礎に第2以下を性格づけていく。第2に，農家経済分析によって階層規定から階級規定へ発展させる。第3に，農民経営をその展開過程としておさえ，発展の条件と矛盾を階層に即し，さらに明らかにする。第4に，流通過程を農民経営の市場対応さらに，農民経営の発展と矛盾を特徴づけるものとしてその性格を明らかにする。これらは，大型トラクター機械化「一貫」体系段階という新しい生産力水準のものとしておさえるとともに，共同利用組合の進展，地域農業の発展という視角の中でおさえていく。